

核・原子力と現代帝国主義

荒木周造

(一)

核兵器および原子力発電について、その政治・経済上の分析、反核・反原発論争の意義づけを、われわれは八十年代一貫して追求してきた。われわれの問題意識がどこまでかは、反核にあり、またそれは言までもない。八十年代初頭の全世界に於ける何百万もの大衆の反核闘争への決起、八十年代半ばに於ける巡航ミサイル・トマホークの合衆国の配備への闘いの盛り上がり、われわれを苦しめた問題の対象化と深化に向かわせた。一九八一年「旗」二二・四号の「核・原発問題」とわれわれの態度(佐野雅之、八四年同五九・六〇・六二号の「山村論」)が、この問題提起を受けた。本論もこの問題提起を受けた。発展・深化を計ることも必要である。しかしながら、今日同論文を顧みるとき、分析と展開の相違をのみならず、基本的論議の手法、脆弱性と強さを指摘する点も、異なる。すなわち、展開と分析と展開とは、先の佐野・山村両者の分析と展開の明確な批判を含んで、

佐野君が問題提起と結論とは同時に述べられる。
「原発のもっている生態系の破壊の危険性とその廃棄物の核兵器への転用と、その使用による核戦争での人類全体の破壊の危機に際しては、われわれは八十年代一貫して追求してきた。われわれの問題意識がどこまでかは、反核にあり、またそれは言までもない。八十年代初頭の全世界に於ける何百万もの大衆の反核闘争への決起、八十年代半ばに於ける巡航ミサイル・トマホークの合衆国の配備への闘いの盛り上がり、われわれを苦しめた問題の対象化と深化に向かわせた。一九八一年「旗」二二・四号の「核・原発問題」とわれわれの態度(佐野雅之、八四年同五九・六〇・六二号の「山村論」)が、この問題提起を受けた。本論もこの問題提起を受けた。発展・深化を計ることも必要である。しかしながら、今日同論文を顧みるとき、分析と展開の相違をのみならず、基本的論議の手法、脆弱性と強さを指摘する点も、異なる。すなわち、展開と分析と展開とは、先の佐野・山村両者の分析と展開の明確な批判を含んで、

た。
佐野君が問題提起と結論とは同時に述べられる。
「原発のもっている生態系の破壊の危険性とその廃棄物の核兵器への転用と、その使用による核戦争での人類全体の破壊の危機に際しては、われわれは八十年代一貫して追求してきた。われわれの問題意識がどこまでかは、反核にあり、またそれは言までもない。八十年代初頭の全世界に於ける何百万もの大衆の反核闘争への決起、八十年代半ばに於ける巡航ミサイル・トマホークの合衆国の配備への闘いの盛り上がり、われわれを苦しめた問題の対象化と深化に向かわせた。一九八一年「旗」二二・四号の「核・原発問題」とわれわれの態度(佐野雅之、八四年同五九・六〇・六二号の「山村論」)が、この問題提起を受けた。本論もこの問題提起を受けた。発展・深化を計ることも必要である。しかしながら、今日同論文を顧みるとき、分析と展開の相違をのみならず、基本的論議の手法、脆弱性と強さを指摘する点も、異なる。すなわち、展開と分析と展開とは、先の佐野・山村両者の分析と展開の明確な批判を含んで、

六 人道主義と日和見主義

二 「反省」——佐野・山村論文の限界

核兵器の存在は人類全体の破壊の危機を招き、故にその廃絶、という論理は誰に誰にも解りやすく明快なものである。そして、それは、現実をそれなりに反映している以上、今日においてそれなりに正しい命題である。しかしながら、核兵器の廃絶、善悪に論議したこの主張は、安易に同歩しては、われわれにとって何の進歩もない。のみならず、核兵器・原子力発電の本質を暴露せず、これらに対するプロレタリアートの態度と行動を指し示さず、

目次

はじめに

一、現状のデッサン

二、歴史の点描

三、技術革新の第三の波

四、核と安保体制

五、自然、技術および生産と原子力

六、人道主義と日和見主義

(1) 「技術」批判の批判

(2) 「反省」——佐野・山村論文の限界(本号)

注(一) 佐野雅之「核・原発問題とわれわれの態度」 「旗」第二三号

注(二) 同前第二四号

注(三) 山村論「核戦争の危険性」 「旗」第一〇二号

注(四) 同前

注(五) 「旗」第一七五号

注(六) 「旗」第二四号